

ニーチェの仏教理解

川鍋 征行

一

ニーチェは、ヨーロッパの哲学者として、仏教に言及している教少ない者の一人である。「ニーチェの仏教理解」というテトマは、さまざまな問題を含むものであるが、この小論では、ニーチェが、いかにして仏教に関心をもつようになったか、そして、これらの理解した仏教はどのようなものであったのかを中心に考察したい。

二

年譜によると、ニーチェは、五歳で父をなくし、六歳で弟をなくすなど、幼児において家庭の不幸を経験している。青年時代において、ニーチェの思想形成に影響を与えた者として、シヨープ

ンハウアーやワグナーなどがあげられるが、パウル・ドイッセンは、プフォルタ学院以来の終生の友であり、古代インド哲学や仏教についての豊富な知識をニーチェに供給し続けた人である。

ニーチェは、古典文学の才能のため、二五歳の若さで、バーゼル大学の教授となり、前後して一〇年間、その職にあった。しかし、若い頃以来の頭痛と眼痛が激しくなり、大学を退職して、スイスとイタリアの間を往来しながら、約一〇年間のうち、『曙光』Morgenröte、『哀びし知識』Die frühe Wissenschaft、『ソラソストラ』Also sprach Zarathustra、『善悪の彼岸』Jenseits von Gut und Böse; Vorspiel einer Philosophie der Zukunft、『道徳系譜学』Zur Genealogie der Mora、『偶像のたそがれ』Götzen-Dämmerung, oder: wie man mit dem Hammer philosophiert 等という重要な著作を次々と世に問うたのである。

そして四五歳の時、トリノの広場で昏倒して以来、約一〇年間、精神錯乱のうちに生を送り、一九〇〇年、五五歳でなくなったのである。

このように一〇年毎に、ニーチェの人生において大きな節目がみられると思われるが、生涯を通してあまりにも病気がちであることに驚かされる。青年期より生涯を通して偏頭痛と眼痛がみられ、その他、軍務中の落馬による病床生活、赤痢とジフテリアにかかると、絶えずならぬかの病気を背おって生き、晩年の一〇年間は「進行性麻痺症」の診断の下に病床生活を送つた程である。しかし、このように病気がちであるにもかかわらず、とくに三十七歳より四四歳頃までの間にさきほどあげたような重要な著作が書かれ、激しい生の燃焼がみられるのである。

『ツァラツストラ』 Also sprach Zarathustra, ein Buch für alle und keinen (1883—1885) は、ニーチェが三八歳から四一歳の頃、かれとしてはもっとも円熟した時期に書かれたもので、遺稿の『力への意志』 Der Wille zur Macht をあわせ読むことによつて、ニーチェの根本思想を理解する手がかりになる本である。『ツァラツストラ』は四部よりなり、序説では人間と超人について書かれている。次に、第一部では、神の死や超人の理想が語られ、「大いなる正午とは、人間が、獣と超人とのあいだに懸け渡された軌道の中央に立ち、これから夕べへ向かうおのが道を、おのが最高の希望として祝うときである。その道が最高の希望にな

りうるのは、新しい朝に向かう道だからである。そのとき、没落してゆく者は、おのがかなたへ渡つてゆく過渡の者であることを自覚して、おのを祝福するだろう。そしてかれの認識の太陽 die Sonne seiner Erkenntnis は、かれの真上に、正午の太陽としてかかることだろう。『すべての神々は死んだ。いまやわれわれは超人が栄えんことを欲す』 Tot sind alle Götter: nun wollen wir, daß der Übermensch lebe: —これがその大いなる正午におけるわれらの究極の意志であれ。」という文で終っている。第二部では、世の教養人を批判し、真の生に生きる超人を望み、第三部では、永却回帰の思想がいよいよ熟してきて、かれ自身のこととなりつつあり、次のように語られる。「いまわたしは死んでゆく、そして消滅する」と、あなたはそのとき言うだろう。『そしてたちまちまたしてわたしは無になる。魂も肉体も、滅びることにおいて変わりはない。だが、わたしがからみ込まれていたもろもろの原因の網目は——ふたたびわたしを創り出すだろう。わたし自身が永却の回帰 der ewigen Wiederkunft のなかのもろもろの原因の一つなのだ。わたしはふたたび来る、この太陽、この大地、この鷲、この蛇とともに。——新しい生、よりよい生、もしくは類似した生へ返つて来るのではない。——わたしは、永遠にくりかえして、同一のこの生に帰つてくるのだ。それは最大のことにおいても最小のことにおいても同一である。だからわたしはふたたびいっさいの事物の永却の回帰を教える

のだ。——だからわたしはふたたび地と人間との大いなる正午 Großen Erden und Menschen-Mittage について語り、ふたたび人間たちに超人を告知するのだ。」と。第四部では、高人達の気持と超人出現の待望がのべられ、「よし。獅子は来た。わたしの子どもたちは近い。ツァラツストラは熟した。わたしの時は来た。これがわたしの朝だ。わたしの日ははじまる。さあおぼれ、のぼってこい。おまえ、偉大な正午よ。」という文で閉じられる。

このように、全篇を通じて、超人出現の期待がのべられているが、超人とはいかなるものであろうか。第一部、「精神の三様の変化」によれば、「汝なすべし」という重荷を荷う、諦念と畏敬の念にみちた精神であるらくだは、「われ欲す」という新しい諸価値を立てる権利をみずからのために獲得した砂漠の獅子となり、さらに獅子は小児となる。小児については「小児は無垢である。忘却である。新しい開始、遊戯、おのれ力で回る車輪、始原の運動、『然り』という聖なる発語である。そうだ、わたしの兄弟たちよ。創造という遊戯のためには『然り』という聖なる発語が必要である。そのとき精神は、おのれの意欲を意欲する。世界を離れて、おのれの世界を獲得する。」と記されている。この小児は、ある意味で超人と思われるが、神の死と共に人間的現存在の冒険的、遊戯的性格が開示される。創造者としての人間の本質は、遊戯することである。人間から超人への変化は、《英知人》の上

類の、或る突然変異ではない。その変化は、有limits的自由の或る変身であり、それが自己疎外状態から取り戻されることであり、その遊戯的性格が自由に発現することである。この超人の出現は、一種の人間形成でもあるが、神の死、永却回帰の思想と関連して超人やニヒリズムの克服を考察していこう。

神の死について、ニーチェは、『悦ばしき知識』の第三、二二五において、次のようにいっている。「狂気の人間。——諸君はあの狂気の人間のことを耳にしなかったか、——白昼に提燈をつけてながら、市場へ馳けてきて、ひっきりなしに『おれは神を探している。おれは神を探している。』と叫んだ人間のことを。——市場には折しも、神を信じないひとびとが大勢群がっていたので、たちまち彼はひどい物笑いの種となった。『神さまが方知れずになったというのか?』と或る者は言った。『神さまが子供のようになり迷子になったのか?』と他の者は言った。『それとも神さまは隠れん坊したのか? 神さまはおれたちが怖くなったのか? 神さまは船で出かけたのか? 移住とときめこんだのか?』——彼らはがやがやわめき立て嘲笑した。狂気の人間は彼らの中にとびこみ、孔のあくほどひとりびとりをにらみつけた。『神がどこへ行ったかって?』と彼は叫んだ。『おれがお前たちに言ってるよ。おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ。おれたちはみな神の殺害者なのだ。だが、どうしてそんなことをやったのか? どうしておれたちは海を飲みほすことができたん

だ？……おれたちは無限の虚無の中を彷徨するように、さ迷ってゆくのではないか？ 白屋に提燈をつけなければならぬのではないのか？ 神を埋葬する墓掘人たちのざわめきがまだ何もきこえてこないか？ 神の腐る臭いがまだ何もしてこないか？——神だって腐るのだ！ 神は死んだ！ 神は死んだままだ！ それも、おれたちが神を殺したのだ！ 殺害者中の殺害者であるおれたちはどうやって自分を慰めたらいいのだ？……こうした所業の偉大さは、おれたちの手にあまるものではないのか？ それをやれるだけの資格があるとされるには、おれたち自身が神々とならねばならないのではないのか？ これよりも偉大な所業はいまだかつてなかった——そしておれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは、この所業のおかげで、これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ！——ここで狂気の人間は口をつぐみ、あらためて聴衆を見やった。聴衆も押し黙り、訝しげに彼を眺めた。ついに彼は手にした提燈を地面に投げつけたので、提燈はばらばらに砕け、灯が消えた。『おれは早く来すぎた』と彼は言った、『まだおれの来る時ではなかった。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている——それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。雷光と雷鳴には時が要る、……この所業は、人間どもにとって、極遠の星よりもさらに遙かに遠いものだ——にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！——なおひとびとの話では、その同じ日に狂気の人間

はあちこちの教会に押し入り、そこで彼の『神の永遠鎮魂弥撒曲』を歌った、ということだ。教会から連れだされて難詰されると、彼はただただこう答えるだけだったさうだ——『これら教会は、神の墓穴にして墓碑でないとしたら、一体なんなのだ』と。』⁽⁶⁾
ハイデッカーによれば、ニーチェの「神の死」の神は、超感性的世界一般の称呼として用いられており、さまざまな理念と理想との領域を表わす名前である。そして「神は死んだ」という意識とともに、従来の最高価値の根本的転倒の意識がはじまる。いわば、超越的原理の否定による現実の生、事物が否定されている状態が、神の死によるニヒリズムであると思われる。『力への意志』において、「ニヒリズムは戸口に立っている。すべての訪問客のうちで、最も気味わるいものは、どこからくるのであろうか？ ニヒリズムは、一つのまったく特定の解釈のうちに、キリスト教的、道徳的解釈のうちにひそんでいるのである。』⁽⁸⁾といわれているように、誠実によって虚偽があばかれ、従来の価値体系が否定されて、しかも、新たな価値体系がみいだせないでいる時、ニヒリズムにとられやすい。ニーチェは、「ニヒリズムとは、至高の諸価値が価値を失うことである。そこには、目標が欠如している。何のためにという問いに対する答えが欠如している。』⁽⁹⁾といっている。このように、キリスト教の道徳主義的な世界観に代表されるような、西洋の形而上学的伝統とその超越的な諸価値が、じつは虚無にほかならないことが、いまや暴露されるにいたったとい

うニーチェの洞察——これが彼のいわゆるニヒリズムの思想である。彼は、現代の危機的状況を、そのように、ニヒリズムとして把握するとともに、このニヒリズムを、まさしくニヒリズムそのものに徹底することを通して超克しようとするのである。⁽¹⁰⁾

すなわち、ニーチェは、ニヒリズムを克服する道として、永却回帰の体験と超人出現を説く。永却回帰については、『力への意志』において、「意味や目標はないが、しかし無のうちへの一つの終局をもたず不可避的に回帰しつつあるところの、あるがままの生存、すなわち、『永却回帰』。これがニヒリズムの極限的形式である。すなわち、無（無意味なもの）が永遠に、⁽¹¹⁾ 仏教のヨーロッパ的形式。すなわち、知と力とのエネルギーがそうした信仰を強制する。それは、すべての可能な仮説のうち最も科学的なものである。私たちは結末をつける目標を否認する。生存がそうしたものをもっていとすれば、それは達成されているはずであるからである。」とのべられている。

この永却回帰の教説は、キリスト教の再結の教説に反対する思想としては、重きをなすようにおもわれるが、客観的真理として妥当するかどうかは別問題である。しかし、終極目的として考えられる超越的原理から解放されて、地上のあらゆる瞬間が、そしてその瞬間において一切が、ありのままに、なんらのかげりもなく肯定されるすがたが「大いなる正午」と呼ばれるのであり、永却回帰の体験を契機にして、大いなる正午による一切価値の価値

転換をなした者が超人とよばれるのではないであろうか。さきほどのべた小児は、ある意味では、超人とおもわれるのであり、変化せる人間、子供と化した人間は、創造的である。この者は本来的、本体的な人間である。もちろん《創造者》とは、労働者としての人間を意味するのではなくて、創造的に遊戯する者、諸価値を定立する者、自分に対してひとつの目標を立て、ひとつの新たな投企を敢行するところの、或る大いなる意志を意欲する者を意味する。⁽¹²⁾ このような超人の出現によって、すなわち、ニヒリズムは克服されたのである。このニヒリズムの克服は、高人達への同情をふりきり、永却回帰の体験を通して覚醒し、ニヒリズムをのりこえて変容した者になったこと、大いなる認識によって光につつまれた者になったことを意味する。

以上のように、ニーチェは、その生涯においても、病氣等により人生を客観視し、現実の生を直視できたとおもわれる。さらに、神の死によるニヒリズムの自覚と、永却回帰の体験を通して超人になることによつてニヒリズムを克服するという思索の展開は、現実の状況とその原因、あるべき状態とそれへの道という、仏陀の好んで説いた四聖諦の問題解決と一脈通じるものがあるようにおもわれる。次にニーチェの仏教理解をみてみよう。

三

書簡等をもつて、ニーチェが、いかにして古代イン

ド思想や仏教について知るようになったかが分る。一八七五年の
ゲルズドルフへの書簡において、「僕がちょうどこの二カ月間、
ますます渴きをおぼえてとてもどうか、インドを捜しまわって
いる間に、君のほうはまさしくこうしたインド的な格言に思いつ
らざるをえなくなっていたのだからね。僕はシュマイツナーの友
人ヴィーデマン氏から、仏教徒たちの聖典のひとつとかいう『ス
ッタ・ニパータ』の英語本を借りた。そして『スッタ』の確乎た
る結句のひとつを、つまり『犀の角のように、ただ独り歩め』とい
う言葉を僕はもうふだんの用語にしているのだ。生の無価値とす
べての目標の虚偽とにたいする確信が、しきりと、ときには強く僕
の心に迫ってくるのだ。ことに病気でベッドに寝ているときなど
はね。それで僕は『スッタ』からもっと多くのことを聞きたらうと
しているのだ、ユタヤキリスト教的な言い回しと結びつけない
でね。つまり、僕はあんな言い回しにたいする嫌悪で、いつの間
にか腹をふくらませてしまっているからだ、——それで僕は不当
なまねをしないよう用心していかねばならないのだ。……生に執
着してはいけないということ、これは明白なのだ。だが、実際に
もうなにもも意志しないということになったら、どこで僕たち
は生に耐えてゆけるのだろうか？ 認識せんと意志することは、
生の意志の最後の領域として、意志すること、もはや意志しな
いこととの、つまり煉獄の領域と涅槃の領域との中間地帯として、
残されているように僕は思うのだ。一方には、不満を覚え、軽蔑

しながら生をふりかえるかぎり、煉獄があり、他方には、精神が
生によって純粹觀照の状態に近づくかぎり、涅槃があるのだ。…
：精神の健康状態——精神があの一つの衝動を、すなわち認識せ
んと意志することを、残していて、そのほかのさまざまな衝動と
か欲求とかからは免れてしまっている状態——を見いだしてしま
ったときに、僕は健康になるのだ。質素な所帯、規則だった日々
の経過、……シューペンハウアーとワグナーを師としたという
幸福、ギリシヤ人を自分の仕事の日々の対象としたという移ろわ
ぬ幸福、——こうした事柄でいまの僕の生活は成りたっているの
だ。残念ながら、慢性の痛みがこれに付け加わるわけだ。」とい
っているように、『スッタ・ニパータ』にたいして好意をよせ、
あわせて生活を整えようとしている。三三歳頃には、ドイッセン
の『形而上学要綱』を読み、三九歳頃にはドイッセン訳の『ヴェ
ーダの教え』を読み「僕にはまったく縁遠い思考法が典型的
に表わされているのを知って、僕はおおいに満足している。しか
し、君の本が否⁽¹³⁾、というところを、『ツァラツストラ』では然
りといっている⁽¹⁴⁾」と記している。さらに、四三歳から四四歳頃、
ドイッセン訳の『ベータ聖典』や『ウパニシャッド』を見る機会
があり、『マヌ法典』のフランス語訳も読んでいる。このように、
ニーチェの、古代インド思想や仏教に対する関心や知識の源泉は、
シューペンハウアーやパウエル・ドイッセン等を通して得られたも
のと思われるが、なかでも、パウエル・ドイッセン (Paul Deussen

1891-1916)は、プフォルタ学院以来の、終生の友人であり、さまざまなかたちで、古代インド哲学や仏教についての知識をニーチェに供給していたものとおもわれる。しかし、ニーチェが大乗経典を読んだ形跡はなく、ニーチェの仏教に関する情報は限られたものであったようにおもわれる。

次に、ニーチェの著作から、ニーチェが古代インド思想や仏教について言及している部分を引用してみたい。ニーチェは、『人間のあまりに人間的』『曙光』『悦ばしき知識』『善悪の彼岸』『道德系譜学』『力への意志』『反キリスト者』『この人をみよ』等で、古代インド思想や仏教について言及しているが、なんといっても『力への意志』において、仏教への言及が多くみられる。

『曙光』において、「インドでは、四〇〇〇年以前に、現在のわれわれよりも多くのことが思索された。……彼らは神々を傍らに投げつけた。——ヨーロッパもまたいつかはそうしなければならぬ。彼らは僧侶と仲保者をも、もはや必要としなかった。そこで自己救済の宗教の師、ブッダがあらわれた。——ヨーロッパはまだ文化のこの段階からどんなに遠いことだろう。」⁽¹⁵⁾と、古代インドとヨーロッパの思索の比較をしている。『悦ばしき知識』において、「新しい闘い。——仏陀の死んだ後も、なお幾世紀もの永いあいだにわたり、ある洞窟の中に彼の影が見られた——巨大な怖るべき影が。神は死んだ、——けれど人類の持ち前の然らしめるところ、おそらくなお幾千年の久しきにわたり、神の影の指

し示されるもろもろの洞窟が存在するであろう。——そして、われわれはさらにまた神の影をも克服しなければならぬ。」⁽¹⁶⁾と真実でない幻影を克服することを力説している。『善悪の彼岸』においては、「仏陀とかシヨペンハウアーのように、道德の束縛や妄念に囚われてではなく、善悪の彼岸に立ってそれを見下ろしたことのある者」といい、『道德系譜学』において、「無神論は、あの理想の最後の発展段階の一つ、あの理想の論結形式かつ内面的帰結の一つにはかならない。——それは二〇〇〇年にわたる真理への訓練の畏怖すべき破局であって、これがついに神への信仰の虚偽を自らに禁ずるにいたったのだ。(これと同様の発展過程はインドにも見られるが、それはまったく独立に発展したものであるだけに、この真実を立証するものといえる。そこでも同一の理想が否応なく同一の帰結に達している。この発展が決定的な点に達したのは、ヨーロッパ紀元前五〇〇年のこと、仏陀によって達せられていたが、これがやがて仏陀の手で通俗化され、宗教とされたのである。」⁽¹⁷⁾と神をたてない教えについていっている。仏教で理想とされる状態、涅槃については、同じく、『道德系譜学』において、「至高の状態、解脱そのもの、ついに達せられたあの全き催眠状態と静寂、これが彼らにはつねに最高の象徴をもってしても表現しつくされぬ神秘そのもの、事物の根底への徹入にして帰入、あらゆる妄念からの解放、〈覚知〉・〈真理〉・〈實在〉。一切の目的・一切の願望・一切の行為からの離脱、さらにまた善

悪の彼岸、と思われるのである。仏教徒は言う、『善と悪、——これは二つながらけい縛である。達悟の人はこれらいずれもの支配者となる。』……解脱等の言句は、いかにはなはだしく東洋風の誇張の文字で飾り立てられていようと、畢竟するに、あの明徹で冷靜な、ギリシア的に冷靜な、がしかし苦惱するエピクロス(18)のそれと同じ評価を表現しているにすぎない、ということだ。要するに催眠的な虚無感情、至深の眠りの安息、つまりは憂苦滅尽——これこそが、苦惱者や全くの失意者どもには、まさに最高の善、価値のなかの価値と見らるべきものであり、これは彼らによって積極的なものとして評価され、積極的なものそのものとして感じられねばならぬものだ。』と、いわれている。さらに、『力への意志』においては、仏教について多く言及される。たとえば、仏教は、攻撃することのない疲労のニヒリズムとされたり、「仏教徒のもとのめるのは、非存在への道であり、それゆえに彼らの欲情からのすべての衝動を忌避する。……仏教の理想のうちには善悪すらからの解放が本質的にあらわれている。」(20)といわれたり、「仏教が實在性一般を否定したのは完全に首尾一貫している。すなわち、『世界自体』が証明されえず、到達されえず、範疇を欠くとされているのみならず、このものの全概念を獲得せしめる手続きが誤っていることが洞察されている。『絶対的實在性』、『存在自体』は一つの矛盾なのである。」(21)といわれる。仏教のニヒリズムについては、「ニヒリズムの宗教の内部でもキリスト教のそ

れと仏教のそれとはいぜんとして鋭く区別される必要がある。仏教のニヒリズムの宗教は、美しい夕を、完結した甘美や柔和を表現する。」と好意的にのべられているようにおもわれる。

『反キリスト者』において、仏教の全般的な性格がのべられている。「仏教は、老成の人間たちにとっての、苦惱をあまりにもやすやすと感受するところの、善良な、温和な、きわめて精神化されてしまった種族にとつての宗教である（——ヨーロッパはまだまだ仏教を受け入れるまでに成熟してはいない——）。すなわち、仏教は、このような人間たちを平和と快活とへ連れもどして、精神的なものにおいては摂生を、肉体的なものにおいては或る種の鍛練をほどこしかえすのである。キリスト教は猛獣を支配しようとながうが、その手段は、それを病弱ならしめることである。

——弱化せしめるというのが、馴致のための、『文明化』のためのキリスト教的処方である。仏教は文明の終結と倦怠にとつての宗教であるが、キリスト教はいまだ文明を眼前にすらしておらず——事情によつてはその基礎となる。」とのべられ、さらに、「仏教は、キリスト教より百倍も現実主義的である、——仏教は、客観的に冷靜に問題を設定するという遺産を体内にもっており、何百年とつづいた哲学運動のうちにあらわれた。仏教があらわれたときには、『神』という概念はすでに除去されてしまっていた。仏教は、歴史が私たちに示す唯一の本来的に実証主義的な宗教である。その認識論（一つの厳密な現象主義）においてもやはりそ

うである。仏教はもはや『罪に対する闘争』ということをお口にせず、現実の権利を全面的にみとめながら、『苦に対する闘争』を主張する。仏教は——これこそそれをキリスト教から深く分かつのだが——道德概念の自己欺瞞をすでおのれの背後におきざりにしている。仏教は、私の用語で言えば、善悪の彼岸に立っている。⁽²⁴⁾」と仏教の歴史の由来を正確に把握し、仏教の如実智見を肯定的に評価しているようにおもわれる。『この人をみよ』において

では、「仏陀の〈宗教〉、これは、キリスト教のようなあんな哀れむべきものと混同されないためには、宗教などと呼ばないで、衛生学と呼んだ方がよいと思うが、とにかく、仏陀の〈宗教〉は、布教のてがかりを怨恨感情の克服という点に置いている。つまり、魂を怨恨感情から解脱させること——これが快癒への第一歩なのだ。『敵意によって敵意がやむ』ことはない、友愛によって敵意はやむ」という言葉が仏陀の説法の劈頭にある——だが、こんな言い方するのは決して道德ではない、こんな言い方するのは、それは生理学だ。⁽²⁵⁾」とのべられており、仏教を、ニーチェのいう怨恨感情に基づくキリスト教のような宗教としてではなくて、心の衛生学として、好意的にとらえているようにおもわれる。このように、ニーチェは、仏教をキリスト教と比較して、その發生、性格等を、ニーチェとしては好意的に表現している。『反キリスト者』において、「仏教にとつての前提は、きわめて温和な風土、習俗における大いなる柔和や寛大であつて、ミリタリズムではない。

またそれは、この運動の發生地が、上流階級や、知識階級ですらあるということである。快活、静寂、無欲が最高の目標としてめざされ、しかもこの目標が達成される。仏教は、ただ完全性の獲得のみ熱望するような宗教ではない、すなわち、完全性が常態なのである。」⁽²⁶⁾という文章は、ニーチェの仏教理解を代表して示しているとおもわれる。

四

以上のように、ニーチェは、ヴェーグ聖典、ウパニシャッド、スタ・ニパータ、ヴェーダンタ哲学等を源泉として、古代インド哲学や仏教についての理解を深めていったものとおもわれるが、古代インド哲学と仏教との関連については、文献学者としてのニーチェの目は鋭いものがあつたようにおもわれる。その他、仏教については、ドイッセンからの、いろいろな情報があつたとおもわれるが、まず、仏教を実証主義的で善悪の彼岸に立つものとして、従つて、仏教は、神の概念を除去している。そして、仏教徒の求めるものは、非存在への道である。すなわち、怨恨感情のない解脱である。(ニーチェにとつて、解脱とは、憂苦滅尽であり、いわば、エピクロスの *ataraxia* のようなものであるといえようか。) 結局、仏教は、弱さのニヒリズムであるが、柔和な甘美な人間性を前提としていて、衛生学や生理学と呼ばれるのにふさわしい。しかし、ヨーロッパは、受動的ニヒリズムとしての仏教

を受け入れるのに、まだ十分に成熟していない。ニーチェは、およそ仏教をこのように理解していたものとおもわれるが、ニーチェのいうニヒリズムは、いわゆる能動的ニヒリズムである。「力への意志」において、「ニヒリズムは一つの正常な状態である。それは強さの徴候でありうる。精神の力は、これまでの目標（確信、信仰箇条）がおのれに適合しなくなつたほどに増大していることがありうる。他方、それは、いまやふたたび目標を、何故にを、信仰を、生産的におのれに立てるほどには十分でない強さの徴候でもありうる。ニヒリズムは、破壊の暴力として相対的な力の極大に達する。すなわち、能動的ニヒリズムとして。」とのべている。

ニーチェは、ニヒリズムを克服する道として、永却回帰の体験を説くが、「すべてのものは生成し、永遠に回帰する。そしてこの思想にふさわしい人類の成熟」を期待している。ニーチェは、プラトン以来の形而上学の真理性に疑問をもちながらも、結局、形而上学の伝統にあるともいわれる。すなわち、論証的な理解を拒絶し、最高の真理を一種の《観》として把握する点でも、ニーチェはなお、彼が超克しようとする伝統の地盤に立脚している。要するに、ニーチェの問題提起は、西洋の形而上学の見取図と合致しているのである。——すなわち、彼は存在者の存在者性を力への意志として、総体としての存在者と同じものの永却回帰として、最高の存在者を、まず否定的に神の死として、ついで肯定的に、——芸術家が芸術作品を創作するように、万物を仮象的形成

物として産出するディオニュソスのな遊戯として思索する。そして、最後に、彼はこういつたことのすべてが開示されているという意味での真理を、この真理が、人間の姿をとって実存するかぎりにおいて、超人として把握するのである。ニーチェは、彼が論難する形而上学的伝統と同様に、虚無、生成、仮象、思惟という存在の四つの視界のうちで、思索活動を行なっている。

このように、ニーチェは、ヨーロッパの伝統的な形而上学をのりこえようとしていたとおもわれるが、結果的には、それができなかったとする解釈もある。しかし、ニーチェはユダヤキリスト教的な思索はもとより、プラトン以来の形而上学の世界とは別の思索の視点に関心をもっていたようであり、三〇代より次第に受容した仏教的源泉が、三〇代後半よりの創造的なニーチェの思索にいかに関与を与えたかはさだかではない。しかし、さきほどあげたように、仏教に関する言及は、いわゆる、彼の晩年になるにつれて多くなっているようにおもわれ、かれの主著である『ツァラツストラ』の名はゾロアスター教の教主であったり、著作名に「善悪の彼岸」と名づけたり、また、全般的に仏教についての記述は好意的であるようにおもわれる。

ニーチェは、ニヒリズムの克服として、永却回帰の体験を通じた超人の出現を説く。ここには、単なる形而上学だけでなく、人間形成がみられる。仏教も、人間の完成とその活動をめざす人間形成の道である。ニーチェは仏教の実証主義を高く評価し、仏教

の神概念の除去と、ヨーロッパがまだ仏教を受け入れるのに十分に成熟していないことを再三にわたって指摘しているが、ニーチェの新哲学は、結局、伝統的な形而上学になったという解釈があるのは、せっかく、ニーチェが人間形成の道をめざしながらも、確固とした行がなかったためではないであろうか。実際、ニーチェには、大乘経典を読んだ形跡はみあたらないのであって、ニーチェが理解している仏教は原始仏教であることを示唆している。⁽²⁹⁾ ニーチェが、大乘経典を読んで、かれの新しい哲学を建設したならば、どのような哲学ができてくるか興味深いと思う。

- (1) 手塚富雄訳『ツアラツストラ』中央公論社、一四六頁。
- (2) 前掲『ツアラツストラ』三二二頁。
- (3) 前掲『ツアラツストラ』四四九頁。
- (4) 前掲『ツアラツストラ』八一頁。
- (5) フィンク著、吉沢伝三郎訳『ニーチェの哲学』ニーチェ全集別巻、理想社、一一三頁。
- (6) 信太正三訳『悦ばしき知識』ニーチェ全集第八巻、理想社、第三二五頁。
- (7) ハイデッガー著、細谷貞雄訳『ニーチェの言葉、《神は死せり》』理想社、五五頁。
- (8) 原佑訳『権力への意志』ニーチェ全集一一巻、理想社、一。
- (9) 前掲『権力への意志』二。
- (10) 吉沢伝三郎著『ニーチェと実存主義』理想社、四〇頁。
- (11) 前掲『権力への意志』五五。
- (12) 前掲『ニーチェの哲学』二七頁。
- (13) 塚越敏訳、書簡集1、ニーチェ全集第二五巻、二九〇頁。

- (14) 前掲 書簡集1、四二八頁。
 - (15) 茅野良男訳『曙光』ニーチェ全集第七巻、理想社、九六頁。
 - (16) 前掲『悦ばしき知識』第三、一〇八。
 - (17) 信太正三訳『善悪の彼岸』ニーチェ全集第一〇巻、理想社、九二頁。
 - (18) 信太正三訳『道徳の系譜』ニーチェ全集第一〇巻、理想社、五〇七頁—五〇八頁。
 - (19) 前掲『道徳の系譜』四七五頁—四七六頁。
 - (20) 前掲『権力への意志』一五五。
 - (21) 前掲『権力への意志』第一二巻、五八〇。
 - (22) 前掲『権力への意志』一五四。
 - (23) 原佑訳『反キリスト者』ニーチェ全集第一三巻、理想社、一六五頁—一六六頁。
 - (24) 前掲『反キリスト者』一六二頁—一六三頁。
 - (25) 川原栄峰訳『この人をみよ』ニーチェ全集第一四巻、理想社、三〇頁。
 - (26) 前掲『反キリスト者』一六四頁。
 - (27) 前掲『権力への意志』三五—三六。
 - (28) 前掲『ニーチェの哲学』三〇六頁。
 - (29) マックス・ウエーバーは、「涅槃が、たとえ消極的にはすべての欲望の断滅であるとともに、積極的には普遍的な愛となつたとしても、そこにはいぜんとして無明が諸悪の根源として残されている。」と涅槃の積極面にも言及している。マックス・ウエーバー著、池田昭他訳『アジア宗教の基本的性格』勁草書房、四三頁。
- (かわなべ・まさゆき、宗教哲学・比較哲学、
埼玉工業大学講師)